石積みの技術　～古代・中世寺院跡総合調査から～

調査課　吉村　晶

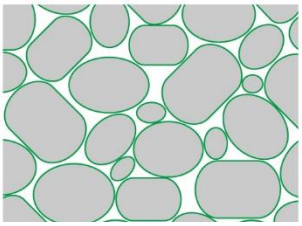
考古学コラム「きずな」NO.22
令和元年７月 25 日
岐阜県文化財保護センター

〈はじめに〉

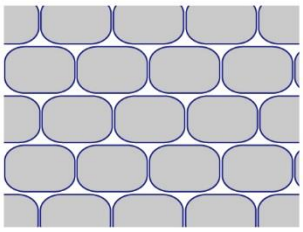
今年は平成から令和へと元号が改まりました。何か新しいことに挑戦したくなるまたとない機会ですが、当センターでは、平成 30 年度から県内の古代から中世に創建されたと考えられる寺院を悉皆的に調査する、岐阜県古代・中世寺院跡総合調査を行っています。地図や文献を元にして現地踏査を行い、現存する寺院だけでなく、地形、構造物、伝承などを手掛かりに、かつて存在したと考えられる寺や旧跡などを、時には山中に分け入って探しています。

今回は、その現地踏査で度々遭遇する、石を用いた構造物の中の一つ、石積みに注目したいと思います。

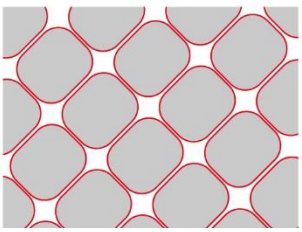
〈石積みの種類〉



①乱積み



②横積み



③斜積み

地域によって石の積み方と名称は様々ですが、目地（継ぎ目）の方向を基準にした大まかな分類〈※〉では、①乱積み、②横積み、③斜積みの順に高度化する、職人の技術とされています。斜積みは、石同士が押し合う迫持（せりもち）作用のため強固です。ただし、上手な乱積みは下手な斜積みよりも長持ちするので、積み方だけで良し悪しは言えません。現地踏査での私見では、谷落としと言われる面が揃わないやや乱雑な斜積みがよく見られました（写真１）。

写真１　山間部に見られる斜積み（谷落とし）

〈石積みの意味と役割〉

調査をする中で見つかる石積みは、多くは丘陵や山麓の傾斜地に築かれた平坦地の法面に見られます。今は人の往来もまれな山間部でも、過去に人の手が加わったという証拠になります。現在の山間部においては、意外なほどたくさんの耕作地やその跡地があります。これは、治水技術が進んでいない時代には洪水災害を免れる立地として利用価値が高かったことも理由の一つです。ただ、石や岩が散在する荒地を拓き耕地化するには、それらを取り除かなければなりません。急傾斜で高い石積みを積むことは、傾斜地においての平地（耕地）面積を広くすることと同時に、耕地にとって邪魔となる石をまとめて除けておくという二つの意味と役割があったのでしょう。

平野部での石積みを用いた治水技術の例としては、当センターが平成 28 年度に調査した大垣市に所在する大垣城跡・城下町から、溝状遺構に伴う石積みを確認しています。これは護岸施設と考えられており、矢羽根積みと言われる積み方をしています。斜方互いに積む高度な技術であり、近代以降の石積みに多く採用されているようです（写真２）。

写真２　大垣城跡・城下町の石積み（矢羽根積み）

〈おわりに〉

現地踏査で発見される石積みが古代・中世の寺院跡に関係するかどうかは、積み方だけでなく様々な角度から検証が必要です。石積みは積み直しの可能性もあるからです。ただ、山奥で石積みに囲まれていると、最初はどれも同じように見えていた石積みにも色々な表情と人の工夫があることが分かり、そこで暮らしていた先人の苦労や知恵に頭が下がります。

〈参考文献〉※名称と分類は下記文献を元に再編集
恵那市教育委員会 1999『石積みの棚田』
岐阜県文化財保護センター2018『大垣城跡・城下町』